人生と愛　　エーリッヒ・フロム著

　　　　　　佐野哲郎　佐野五郎訳　　1986年　紀伊国屋書店　報告　松本倫明

~私たちの社会の過剰と倦怠~

————受動的人間————

語義

過剰と倦怠について論じるにあたって、その語義を明らかにする。

過剰は、「絶対的に必要なものを超えること(P7)」を表す。これは肯定的には「溢れ出る」ことだが、否定的には無益、無駄、「余分」という意味である。

次に倦怠或は不快とは、退屈、不機嫌を引き起こすものである。

ここで悪い意味の過剰と倦怠は関わり合っていることが解る。そして私たちが吟味しなければならないのは、我々が過剰の中に生きているのではないか、ということである。

消費人

フロムは新たに消費人という用語を出す。その意味する所は、自分の内に空虚感、不安を抱き、それを忘れる為に消費せざるを得ない、受動的な人間である。

受動と能動

ここで受動、能動の意味も明らかにしなければならない。現代的には、能動は「目に見える効果のある行為(P17)」、受動は「無目的のように見え、エネルギーの使用が認められない態度(P18)」を指す。

然し消費人の観点からいえば、悪い過剰(「浪費」と解釈)をうむ能動は結局、無目的な受動なのである。一方、観照や瞑想のように「ただ<ある>ことに集中している[[1]](#footnote-1)」状態が積極的なのである。

————現代の退屈————

古典的能動

限りなく洞察を深め、成熟を高める力、愛と芸術的表現の力、これらは人間の中に潜在し実現されるべき力である。古典的な意味の能動とはこの力の具体化である。

現代の愛

然し現代社会において、能動は具体化されない。近代人は愛によって生み出すことよりも、愛されることばかりに腐心する。そうして生まれる愛情あるべき生活は、互いに騙し合う、或は騙されたと感じる様な、芝居の愛の実践である。

文化の退屈

我々の文化において、退屈が如何に苦痛であるか、認識されていないようである。人は酒、セックス、精神安定剤等の手段で退屈を紛らわそうとするが、実は時間の浪費を感じる。そして時間を惜しみ、節約したとしても、それによって生まれた余剰の時間の使い方が解らないのである。

————作られる欲求————

産業革命

産業革命は二度起こった。第一次では、機械が人間や動物の、乃ち自然の力に代った。それと同時に生物の力では限界があった過剰が全ての人間の為に生産されるようになった。

第二次では、更に人間の思考をも、機械が代用する。それは他の機械を制御する機械という形で現れる。

加えて、この経緯で生まれた近代社会は欲求さえも生産するようになった。人間の願望は本人から発するのではなく、広告等の外部の要因から生み出され、操られる。

消費の宗教

外部から作られる欲求は、消費の無制限な増大を導く。それは「逸楽郷の宗教」乃ち「気儘に消費し耽溺することが理想とされる価値観」とさえ言える。こうして「受動性が強まり、また、嫉妬や、貪欲が強まり、ついには内的な弱さの感覚、無力感、劣等感が増大[[2]](#footnote-2)する。人間は、自分が持つものとしてのみ生き、あるものとして生きないのである。(P38)」

————家父長制の危機————

父権性

家父長制社会での最高原理は国家、法律、抽象であり、家母長制社会では自然の絆である。また人間は自己の中に良心という形で父長的規範を内包する。

家父長制の崩壊

近代西洋において家父長制という伝統的関係は崩壊しつつある。それは過剰の問題と関わっている。

第一に、断念という考えが失われている。神や支配者が望む為に、断念し、服従する。然し過剰の増大の中では、有り余っているにも関わらず、断念する必要はなくなっている。

第二に新しい生産技術が挙げられる。近代の生産様式はグループの作業を要求し、上級——下級という区別は失われつつある。

第三に、服従からの解放を目指してきた政治革命や女性の地位を上げてきた女性革命がある。

最後に最も重要なのが、若者に対する社会の無能さの露見である。近代以降、科学は大いに発達し、月旅行まで囁かれる。然し、自殺は増加し、世界大戦は防げず、成功主義社会の長所の裏側には、最重要課題を処理する能力の欠如が伺える。

人は最早家父長制=権威主義社会の構造や働きを信じていないのである。

————宗教の行き詰まり————

新たな宗教

家父長制=権威主義構造の危機は宗教の危機を導く。最早従来の宗教は最高の価値を表現せず、信頼を失った。ここで新たな宗教、乃ち「技術の宗教」が発展した。

技術の宗教には二つの側面がある。それは逸楽、乃ち無限の欲求充足である。

第二に人間が神になろうとしていることである。人間は観察者であることを超え、生命を人工的に作り、宇宙へ旅立つようになった。

この新たな宗教の道徳規準はただ一つ、技術的に可能なことはやり遂げないということだけである。

新しい道徳の兆し

他方、若い世代において、新たな道徳原理が尊重され始めている。更に仏教は権威主義的基盤がない道徳原理のモデルである。不道徳は人間の調和と平衡を奪う。然し道徳的な行動をしたいという自己の内なるヒューマニズムの良心を失ってはならない。

————人間的成長の限界に抗して————

人間は過剰を追求するのではなく、自分の内的発展に何が必要なのか、考えなければならない。

~攻撃の発生源について~

人間固有の攻撃は、二種類に分けることができる。

生物学的攻撃

動物は自分の生活の利益が損なわれうるとき、逃避、或は攻撃を行う。これは人間にも見られる。然し人間の場合、この種の攻撃はより強烈になり得る。それは人間は動物と違い、未来を予知し、暗示がかかり、また守るべき最高の価値というものを持っているからである。

人間の性格に基づく攻撃

より人間的で強力な攻撃は人間の性格に基づいている。この種の攻撃について、フロムは詳しく論じようとしないが、その一例として、サディズム的性格を挙げる。サディズムの本質は、人間に固有の、他の生き物を完全に、絶対的な立場から支配したいという願望である。

~夢は世界の人間の言語である~

夢の特徴

夢は正解共通の言語であり、いわば人間語と言える。その特徴は以下の通り。

|  |  |
| --- | --- |
| 夜、眠りの言語 | 象徴的、感覚的、心の中の何かを表現 |
| 覚醒時よりも非合理的だが、賢明、洞察力あり | 創造的 |

覚醒時の不自由

目を覚ましている時の人間は、生活の苦労を経験している。生きるために労働し、襲撃から身を守らねばならない。

こうした行動傾向は思考に影響を与える。人間は、あるべきとされる行動をする、乃ち理性的に振る舞わねばならない。他人と同じように、他人に理解されるように生きる。その時、本来人間が持つ創造性は社会から抑えられ、表現を恐れるのである。

睡眠時の自由

一方、睡眠中は人間は自由である。人間は自分が考え、感じることをその儘考え、感じる。「ただある(P105)」だけでよく、自分を最も明らかに表現する。

夢を学ぶということ

フロムは夢の意味するものを学ぶことが有益であり得ると説く。なぜなら夢を理解することは自分、他人、人間をより理解することに繋がるからである。人間を知れば知る程、彼は豊かに、生き生きと、強く生きる。更に夢を知ることで、現実社会の知性主義、一辺倒の観念的思考から距離を置き、感覚を繊細にすることができるのである。

~非心理学者のための心理学~

非心理学者は誰か

フロムは、非心理学者は存在しないと言う。なぜなら人は誰でも多かれ少なかれ、自分や他人がどう感じているかを、日常生活で考えるからである。

心理学とは

1. 前近代的心理学

心理学は紀元前から歴史を持っている。然し、現代はその心理学は寧ろ、道徳的、宗教的、精神的動機をもった倫理学や哲学と呼ばれ、より良い人間になる為に人間の心を知ることであった。

1. 現代の心理学

一方、現代の心理学は、より成功する為に心を知ろうとする。それは現代では、「ある」ことよりも「持つ」ことに関心がよっているからである。

現代心理学の二類型

現代心理学で主流を成す学派は、本能理論と行動主義理論である。前者は人間の行動を還元的に本能で説明し、後者は条件付けによって人間(動物)が行動「する」ことを研究する。後者にとって「する」ことが重要であって、その動機は大きな意味を持たない。

何れの立場にせよ、共通なのは、人間の人生は自ら決定するものではなく、他の要因に駆り立てられるということである。

フロイトの精神分析

第三の流派は、フロイトが提唱した、人間の熱情の原因や条件の研究である。それは、人間の独立の為に無意識を知るという啓蒙主義的なものであった。

1. エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳(1991)「愛するということ」紀伊国屋書店に詳しい [↑](#footnote-ref-1)
2. 持っていることが規準となる場合、その規準の達成には際限がなく、比較は劣等感へと繋がる。 [↑](#footnote-ref-2)